

被災地 NGO 協働センター2016 年度事業計画

もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える

阪神・淡路大震災から 21 年を過ぎ、東日本大震災からも 5 年を迎えた。その間、様々な災害があり社会情勢も変化したが、果たして良い方向に進んでいるのだろうか？東日本大震災の被災地では、復興への課題が山積みとなり先行きが全く見えない状況である。仮設住宅に入居している方々のうち、最長で後 5 年間も住み続けなければならないという方が 2700 人に上るということも分かった。外部の支援者は 5 年を機にさらに撤退の流れが加速している。被災地を見捨てていない、応援を続けているんだというメッセージを送り続けることが必要だ。

また、昨年発生した鬼怒川決壊による水害では、多くの被災者が在宅避難者として苦しんでいるにもかかわらず、十分な物資や食料の支援も行われなかった。避難所の環境は劣悪であり、災害後の 1 ヶ月間はおにぎりや菓子パンのみの生活が続いた。このように多くの災害を経験してもなお、十分にその教訓は活かされていない。

また、災害が起きた直後には、多くの人々が駆けつけ災害ボランティアとして活躍する一方で、緊急期が過ぎるとあっという間にボランティアは去り、復興期には地元の方しか残っていないということもよく見受けられる。これまでの被災地支援を行ってきた経験を踏まえると、外部支援者の知恵やネットワークをうまくつなげ、応急対応期から復興期を見据えて、住民の自立につながる支援を行う必要がある。しかし、現状ではそのような復興期のボランティアはごく少数に限られた団体と、地元に残らざるを得ない団体や個人が踏ん張っているだけだ。

一般的な災害マネジメントサイクルでは、災害発生→応急対応→復旧・復興→予防という流れになっている。ところが、実際には外部のボランティアはほとんど残らず、その結果、災害から地域をどう再生し復興させるのかという議論を誰もすることなく、次の災害への予防だけを考えてしまっていることがある。本来であれば、災害にあった地域をどのように再生し復興するかという議論を、外部者や過去の災害の知恵を参考にしながら行うことが必要だ。自然との付き合い方や災害との向き

合い方、被災地の新たな魅力づくりなどをどのように地域に残していくのかということも、本来であれば災害ボランティアの大きな役割の一つであるはずだ。

この復興期の議論は、とても重要だ。阪神・淡路大震災から 10 年目の神戸宣言では、「もう一つの生き方を選択する」ということが掲げられた。復興 10 年の中で、今までの価値観を転換し、新しい選択をするということが重要であると気がついたのである。中越地震からの復興では、「価値観の軸ずらし」ということが言われた。今までの価値観の軸をずらし、新しい価値観で地域の復興を図っていこうという試みだ。このことも、今までの価値観を疑い、もう一つの生き方を選択するということに他ならないだろう。災害からの復興はまさにもう一つの生き方を模索し選択するという連続の中で成し遂げられるのではないか。そして、そのもう一つの生き方を作り出すきっかけの一つとしてボランティアがあったのだろう。

もう一つの生き方を選択するということは、もう一つの働き方を選択するということでもある。阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラムでは、多くの若い世代(阪神・淡路大震災を経験していない世代)が参加をしてくれた。フォーラムの中で掲げた 10 のアクションプランを実現していくためには、こうした若い世代がどのような選択をしていくのかということが非常に大事である。

こうして、もう一つの生き方を模索し、もう一つの働き方を増やし、もう一つの選択肢を選ぶことが、災害からの復興、災害への予防、そして新しい社会を生み出すためにも必要なことではないだろうか。阪神・淡路大震災以降、ボランティアが作り出してきた新しい生き方をさらに模索していきたい。

■事業概要

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は、基本方針に示した通りテーマを「もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える」と設定した。次世代の若者たちと一緒に「もう一つの生き方・働き方を模索する」ということを寺子屋全体のテーマとして「なりわい」について議論をしていきたい。CODE 未来基金や阪神・淡路大震災から 21 年たった今、特に大学のボランティア機関とも連携をしつつ、様々なワークショップなども取り入れていきたい。

2. まけないぞう事業

まけないぞう事業は今年度も継続する。東日本大震災から 5 年経ったが、未だに多くの課題が山積みになっている。当センターでは、まけないぞう事業を通じた東北支援をすくなくともあと 5 年は続けていきたいと考えている。まけないぞうが「生きがい」となっている作り手さんも多い。その原動力は何なのかを東北の作り手さんへのヒアリングを通して分析していく。また、その思いをしっかりと発信していく。このようなヒアリングも通して“まけないぞうがメッセージを売っている”ということを確認しつつ“ボランティア経済圏”の具現化に努めていく。

3. 災害救援事業

災害時には迅速に対応できるよう、これまでのつながりを生かしつつ、阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験を災害が発生した地域の特性に合わせて活用しながら活動を行う。

常総市での支援活動は、今年度も継続し、市民が中心となりつくり出そうとしている復興計画への提案も行なっていく。

将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震など）を念頭に置き、事前に顔の見える関係づくりを進めていく。

また、能登半島地震 10 年に向けて KOBE 足湯隊とともに住民の声をまとめた冊子発行を目指す。

海外での災害発生時には CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートする。

4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

今年度は寺子屋事業を柱にしつつ、「もう一つの生き方・働き方」を若い世代と共に考えることで、もう一つの社会の実現に向けた提言を行う。さらに、東日本大震災のこれまでの活動の教訓を活かし、5 年を過ぎた現地の今後に向けて提言を行う。

また、昨年度に引き続き「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム」の宣言文及びアクションプランの具現化を持って提言とする。

また、同様に足湯ボランティアの活動及びまけないぞう事業から見える課題及びボランティア経済圏の具現化について提言を行う。

5. 広報事業

昨年同様、機関紙や HP, FB 等で広報活動を行っていく。

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストを継続する。

(B) JICA 草の根支援事業実施

(C) 基本方針に合致すると思われることにおいても可能な限り取り組む。

■事業内容

1. 寺子屋事業

(A) もう一つの生き方・もう一つの働き方を考える
年 6 回程度の予定。

今年度は、神戸大学学生ボランティア支援室の「なりわいカフェ」とのコラボを模索する。

第 1 回：農業の仕事ってなんだろう（予定）
～時には“アホ”になってみよう～
尾澤良平（予定）

第 2 回：未来基金での活動について（予定）
～「覚悟」を持って生きよう～
上野智彦・今中麻里愛（予定・CODE）

第 3 回：台湾の寄付文化について（予定）
～日本の若者と台湾の若者の違い～
李フシン（予定・京都大学）

2. まけないぞう事業

(A) 東日本大震災支援の継続

現在、作り手さんは約 50 人。まけないぞうが被災者にどのような影響を与えているのか、被災者が制作を続ける理由など、作り手さんからじっくりとヒアリングを行い、ボランティア経済圏と担い手の関係についても考察する。

また東京大学被災地支援ネットワークの呼びかけでできた盛岡を中心としたネットワーク「復興グッズ被災地主

宰者連携会議「コレカラ」へ昨年同様に関わっていく。

(B) 広報・販促に関して

今年度は販売目標を1万5000個とし、広報活動に力を入れる。特にヒアリングで聞き取った作り手さんの想いを発信することで、メッセージ性を高め販売促進につなげる。

【販売イベント】

20年イベントの企画を企てる。

(C) その他

・被災地ツアー

スタッフと同行するかたちで、数名単位で現場視察やボランティア活動を行う。呼びかけについては、ML、HP、Facebook などを通じて行う。被災地への関心を持ってもらおうと同時に販促にもつなげていく。

(D) “まけないぞう” 支え合い募金

昨年度末から行っている“まけないぞう”支え合い募金については、引き続き呼びかけを行っていく。目標金額は全部合わせて200万円。

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 熊本地震支援活動

これまで築いてきた震災がつなぐ全国ネットワークとの関係やその他のネットワーク、高野山真言宗総本山金剛峯寺社会人権局、公益財団法人 Civic Force との関係などを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り、人間復興へつながることを意識しながら活動する。

(B) 復旧・復興支援事業

・東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業を通して、引き続き神戸からのサポート体制を行っていく。また、広島の方々と協力し七回忌法要をサポートする。

・広島土砂災害支援の継続

2014年8月に発生した広島土砂災害へは、三回忌法要への参加などを通じ、つながりを継続していく。

・常総市豪雨水害支援の継続

昨年9月に発生した東北・関東豪雨水害の被災地である常総市への支援を継続する。現地のNPOである茨城NPO

センターコモンズ、関東・東北豪雨災害による障がい者避難実態調査連絡会などと連携し、復興寺子屋勉強会やまちづくりワークショップ等を通して、今後は市民がつくる復興計画づくりに協力していく。

・復興寺子屋

4月22日、23日@常総市

講師：松本誠（市民まちづくり研究所）

(C) 南海トラフ巨大地震に備えて

・静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練（3月開催予定）

静岡県で行われる災害ボランティアのための図上訓練に参加し、日頃のからの顔の見える関係を築いていく。

・たつの女性が担う地域防災塾との協力

昨年度に引き続き、たつの市での活動等に積極的に関わっていく。たつの足湯隊の活動も必要に応じてサポートを行う。

・高知県、徳島県などとのネットワーク作り

2013年度につながった高知県黒潮町へのスタディーツアーをたつの女性が担う地域防災塾と連携し行う。また、2014年7月の台風被害の支援に入った徳島県や南海トラフ巨大地震で被災地となりうる可能性のある地域とのネットワーク作りを行う。

(D) その他

・KOBЕ足湯隊のサポート

KOBЕ足湯隊の事務局として引き続き活動をサポートしていく。今年度は震災がつなぐ全国ネットワーク及びレスキューストックヤードと連携し、能登半島地震から10年を迎える被災地の方々の声を届ける冊子を作成するため、能登半島での活動を重点的に行う。（年2～3回の予定）

2) 海外災害に対する緊急援助活動とその後の復興へつなげる支援活動

(A) CODE 海外災害援助市民センターとの連携

例年通り、海外での災害発生時にはCODE海外災害援助市民センターの事務局のサポートなどを行う。また、寺子屋事業で触れたように、CODE未来基金とも連携する。

4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

(A) もう一つの生き方、もう一つの働き方についての模索

阪神・淡路大震災やその他の災害の教訓や課題を掘り起こ

しつつ、東日本大震災からの提言と、寺子屋事業を通して、「もう一つの生き方、もう一つの働き方」を模索し新しい社会に何が必要かを提言する。

(B) ボランティア経済圏の具現化

(C) インターン受入れ

神戸学院大学／神戸松蔭女子学院大学
今中麻里愛（神戸学院大学）

<関係団体・グループとのネットワーク>

- ・認定 NPO 法人しみん基金 KOBE/副理事長
- ・震災がつなぐ全国ネットワーク/団体会員
- ・阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター/
事業評価委員
- ・日朝兵庫友好の会/常任委員
- ・特定非営利活動法人レスキューストックヤード/評議員
- ・特定非営利活動法人 CODE 海外災害援助市民センター/
理事
- ・日本災害復興学会/理事
- ・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
- ・9条の会ひょうご
- ・神戸大学キャリアセンターボランティア支援部門アドバイザー委員会/委員
- ・社会福祉法人野花会/評議委員
- ・おおさか災害支援ネットワーク
- ・たつの女性が担う地域防災塾
- ・伝統木造技術文化遺産準備会

(その他)

神戸大学非常勤講師(村井)／福井大学非常勤講師(村井)
／神戸松蔭女子学院大学非常勤講師(村井)／神戸女子大
学非常勤講師(村井・頼政)／日本防災士機構講師(村井)

5. 広報事業

(A) 通信「じやりみち」の発行

ネット普及により紙媒体のニーズが減っているため、年3
回の発行を予定

(6月／10月／3月)

(B) ネットニュースなどの活用

8bitNEWS など市民メディアを活用する。

8bitNEWS : <http://8bitnews.org/?p=7381>

(C) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

(D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

- ・災害救援ニュース
- ・ハンストニュース
- ・まけないぞうがつなぐ遠野物語
- ・まけないぞう購入者向けメールマガジン
まけないぞうを購入した方を対象に不定期のメールマ
ガジンを発行することで、リピーターや会員を発掘する。
- ・その他関連ニュース

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストの継続

2012年6月14日～引き続き原発がゼロになるまでリ
レーハンストを継続する。

(B) JICA 草の根支援事業（予定）

JICA 草の根支援事業を受託し、たつの女性が担う地域防
災塾のメンバーとともに、インドネシアの防災について学
び、現地の方々とも交流を行う予定だが、現在インドネ
シア政府の承認待ち。

(C) その他

基本方針に合致すると思われる活動は可能な限り取り組
んでいく。